認知症カフェへの思いは今も変わらない樋口さん。見せてくれたのは昨年11月、「オレンジ協力隊」ののぼり旗を同店前に掲げた時の写真。認知症を発症した人や家族も暮らしやすい街づくりに取り組むチームのPRのためです。

身近な場所に活動があれば、いろんな人が関わるきっかけに。「認知症になっても安心して暮らすには『互いに知る』ことが大事。そして進行を遅らせるには、人に会ってあいさつして話しをすることが大事なんです」と樋口さん。

参加者は宮ノ陣に住んでいる人が中心ですが北野町など近隣地域からも来ています。江上さんは「私自身、別の場所で認知症カフェとスマホ講座の両方をやっていますが、スマホを入口にした方が人が来やすいですね。そこは意図的にやらないとね」と話します。

「友達追加するからQRコードを出して」「どこから出すの？」と矢継ぎ早に質問が。江上さんたちが丁寧にサポートします。

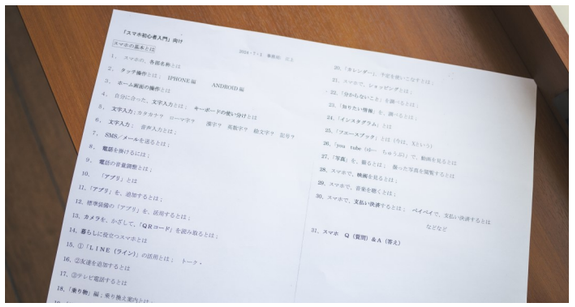
実は当初は、認知症カフェの開催を目指して活動が始まりました。仕掛け人は樋口寿さん。生活の動線上にあるコンビニなら人が集まりやすいのではと、令和4年の春頃に同店オーナーに相談。すんなりと会場は決まりました。「なかなか人が集まらず、私にサポートの要請がありました」と江上さん。「認知症カフェって人集めが難しいんです。そこで多くの高齢者が苦戦するスマホを切り口にしました」。最初は2、3人の参加でしたが、「コンビニの入口に貼ったチラシや参加者からの口コミで徐々に参加者が増えました」と、今は指導役も含めて10人近く集まります。

昨年、樋口さんが認知症の診断を受けました。「きっかけがスマホでもこうして人が集まれば、自然と認知症カフェの機能も持ちますよね。それで十分価値があることだと思うんです」と江上さん。樋口さんは今も主催者の一人として参加しています。

・・・

買った巻きずしを頬張りながら取材していると、「ねえ、この赤いマークはどうやって消すの？開封して大丈夫？」と質問され、自然と私も指導役に。ふとコーヒーマシンの方に目をやると、出来上がりを待つ客がこの光景を眺めていました。

（担当・フトシ）



（左）「ご予約席」の立て札は店のオーナーが用意してくれたそう
（上）江上さんが毎回作成する講座メニュー。「終わった後には参加者に『解決しましたか？』と聞いています」